
未来時計

黒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来時計

【Nコード】

N4240D

【作者名】

黒鷹

【あらすじ】

誕生日に彼・亮を事故で亡くしてしまった亜美。けれど、空から降ってきたものすごく雨男の魔法使いによって、亮をよみがえらせてもらう。けれど、亮の記憶消えうせてしまった。魔法使いは言う、「記憶が全て戻ったら、死んでしまう」と。

第一章 天空から雨男？

——キキイイイイ！！ドンッ！！

11月4日。天気は快晴、最高気温は20。最低気温は12。

交通量はそこそこ、渋滞は無し。

そして、彼と向かえる3度目の私の誕生日。

目の前に広がる、血の水溜り。血溜りとでもいうの？

と、冗談はココまで。

彼が、車にはねられた。

「^{ショウ}亮っ・・・！！」

小学生が泣きながら逃げていく。

というのも、トラックに撥ねられかけた小学生（若干3年生くらい）を助けるためにトラックの前に飛び出し、撥ねられた。

彼らしいといえば、彼らしいけれど。

「ちょ．．．冗談やめてよ．．．．．亮？ねえ、亮ってば！」

私の彼・菅谷^{スカタニ} 亮は、殺しても死なないような妙に丈夫なヤツだった。

死ぬわけがない、そう思ってた。

気がつけば周囲は大混乱。

血の海を見た人が泣くわ喚くわ．．．。

泣きたいのはこっちだっつうーの。

「亜美^{アミ}．．．．．悪い、まずつたみてえ．．．．．」

消え入りそうな声で小さく呟く亮。

ふざけんなっ！て、ぶん殴ってやりたかったけど、何かそうはいかないみたいで。

「．．．．死んだら．．．許さないからっ．．．．」

「．．．．．ちょっと．．．無理．．．かも．．．．．」

頭から血を流しながら、少し冷えた私の手を弱弱しく握った。

「．．．．ごめん．．．．．」

その言葉を最後に、すうっと手から力が抜け、再び血の海に戻って

いった。

待って、待って。

こいつ、死んだの？

そんなことって……しかも、人の誕生日に？

『おい、やつけに冷静だな。姉さん。』

あれ？今なんか……聞こえたような……気のせい？

『気のせいじゃないって。ほおら、上上。』

頭の中に直接入ってくるような声が気持ち悪くて、ぶんぶん頭を振った。

すると、ザアッと雨の音がして、傘を指した男が空から降ってきた。

しかも、神の色は金髪。服は一応真っ黒だけど、ジャラジャラ何か光ってるし。

ちなみに、雨が降っているのは男の上だけだ。

もしかして、ものすごい雨男？

なわけないか。

「……夢、なのかな……そうであってほしいんだけど……」

『ざーんねん、夢じゃないんだな、これが。』

からかうような男の声にいちいち苛々する。

というか、彼氏が死んだ事をどうして嘆かせてくれないわけ？

そして私、何でこんなに冷静？

『あーちよっと、姉さん。全部聞こえてるかねー。』

「あ、そう。で、誰？」

『そんなことより、なんで姉さん泣かないわけ？これ、彼氏なんですよ？』

不思議そうな顔して、亮の腹をトントン、と蹴った。

「蹴んな、こら。」

私は、少女漫画の主人公みたいにキラキラキューン、としてるわけでもなければ、少年漫画のヒロインみたいにボンツキュツボンツでもない、平凡な高校2年生。

残念ながら、心ときめくようなセリフを吐けはしない。

『へえ、変わってるねえ。まあ、確かに貧相な胸だけど。』

「うるさい、空から落ちてきたやつが何を言うか。」

『こりゃまた失礼。』

つていうかこいつ、誰だ？

何で私、話してるわけ？

「ねえ、あんた誰？」

『俺？俺はねえ……うーん、そうだなあ……天使！』

「嘘付け。まず天使に行き着くまでに間があるのかおかしいでしょ。」

『あ、そうだね。しゃーねー、言うか。』

「いや、いなくなってくれば別にそれでも構わないといいますが……」

『言います！言うからそんなに急かすなつての。ったくもー、最近の子は……』

はあ、いつまで引っ張るんだ。と、私はため息をつく。

今さら気付いたが、周りの時が止まっているみたいだ。

まあ、空から人が振ってきて騒がないわけ無いか。うん。

『俺は、未来の国からやってきた魔法使い様だ。』

「話題引つ張りすぎ。そろそろ読んでる人飽きる頃だよ。」

『本当だつて……。空から降ってきて、時間止まつてるんだから、別に变じやないだろ?』

「……じゃあ、その魔法使い様がこんな一介の平凡な女子高生カッコ悲しみの海に沈むカッコトジに何の御用で?」

はあ、と今度は魔法使いとなのる男がため息をつく。

そんなことより、何してるんだろ?・・・私。

『うつわー、ムカツク。つていうか、カッコなんて作者に任せとけよ。——んんつ。では改めて、俺はミネルヴァ。魔法使い。お前に夢を見せにきた。暇つぶしに。』

「最後の、言わないほうがいいと思うよ。」

『あ、そう?じゃ、忘れて。』

「無理だつて。……で、夢つて?どついつこと?」

良くぞ聞いてくれました、と言わんばかりに胸を張って、傘を杖に変える。

その瞬間、雨がザバツと降り注いで、男は一瞬のうちに水でビシャビシャになった。

「つぶ。」

『笑うな。一介の平凡な女子高生カッコ悲しみの海に沈むカッコトジ。俺が、お前の彼氏、生き返らせてやろうって話。』

「え……？」

こんなおちゃらけて馬鹿っぽい雨男が、亮を生き返らせてくれる？

そんなこと、あるわけないじゃん。

馬鹿にするのもいい加減にしてって感じ。

『おちゃらけて馬鹿っぽい雨男で悪かったな。』

だけど、もしこれが現実だとしたら、そりゃあ亮に戻ってきて欲しい。

血の海から這い上がってきて欲しいけど。

『まあ、ちょっと変わって生き返るわけなんだけど……』

「変わってって、どういうこと？」

『記憶がないんだよ。ま、1度は零れ落ちた記憶だからな、手繰り寄せれば戻るけど。』

「けど？」

『記憶が全て戻ったら、死ぬ。今の状態に戻る、ってことだな。』

私のことも、思い出さないかもしれない。

万が一思い出しても、全部思い出したら再び失ってしまう。

そんなの、悲しすぎる。

『じゃあ、やめる？言っとくけど、これはチャンスだぜ？』

意地悪い条件だ。

こんなに冷静ではいるけど、やっぱり亮が死ぬのは悲しい。

たとえ私の事を覚えていなくなって、また思い出なんて作ればいい。

あくまでも、ポジティブシンキングで行こう！

「……乗ってやろうじゃないの。雨男。」

『ミネルヴァだって言ってる？』

に、と口端を吊り上げて、不気味な笑みを笑う。

そして、ミネルヴァという男は、亮の心臓に杖を突き刺した。

「ちょ……えっ……!？」

一瞬にして、杖が大きな鍵へと変わり、すうっと吸い込まれていった。

『未来時計・改良版だ。精々頑張れよ、姉さん?』

ミネルヴァがパチン、と指を鳴らすと、周囲が一瞬で騒然となった。

「亮!・・・亮っ・・・!!」

「俺、何して・・・いつっ・・・」

するとそこに救急車がやってきて、タンカーに亮を乗せる。

「あ、あの・・・私も乗って行っていいですか?」

「どうぞ。」

優しい(ちよつとかつこよさげな)救急隊員が、ニコツと笑って私を救急車の中に入れてくれた。

亮は、手術をして、一命を取り留めた。

まあこれで万が一死んだら、私は一生あの雨男を恨んだんだろうけど。

さて、運命に抗ってみますか。

おちゃらけてて馬鹿っぽい、けどちょっと怪しい魔法使い様に感謝しつつね。

第二章 大いなる1分

11月6日。最高気温は18度、最低気温は10度。

少し肌寒くなってきた。夜は流石に半そででは出歩けない。

消毒液くさい、やけに真つ白な病室で、私は彼が目を覚ますのを待っていた。

亮の怪我は、肋骨2本と左腕、右足の骨折と、肋骨が突き刺さって開いた肺の穴。

手術で何とかなったとはいえ、数日は絶対安静だろう。

病院って静かなところかと思いきや、結構騒々しいみたい。

まあ、忙しい仕事だもんね。

「……ん……あれ……俺、なんで……」

「……亮。よかった、目、覚めて。」

ほっと胸を撫で下ろす私を、不思議そうに見つめる亮。

「……誰……？俺、あんたのこと、知ってる？」

そっか。そうだった。こいつ、何も覚えてないんだっけ。

しかも、全部思い出したら、また死んじゃうんだよね。

大丈夫、忘れてない。

けどまあ・・・少しくらいはいいよね。

「私は・・・亜美。ホンジョウ本城亜美。亮の・・・・・・・・・・友達。」

いきなり彼女です、なんていえないよね、やっぱり。

友達ってことにしといたほうが、亮も楽だろうし。

「ふうん・・・ね、俺、なんでここにいるんだっけ・・・・・・・・」

「事故に遭ってね。まあちよつと記憶もなくなってるみたいだけど、多分すぐ戻るよ。」

そうはさせないけどね。

亮を失うわけには、行かないから。

「俺・・・・・・・・あんたの・・・・・・・・本城のこと・・・・・・・・」

「あつ！え、えつと・・・・花！お花の水、かえてくるねっ。は、話は、後で・・・・」

私は、逃げるように部屋を飛び出した。

何で私が逃げなきゃなんないの？

亮が何いうのか、怖かったって言うわけ？

女々しいにもほどがある。

『別に、女の子なんだからいいじゃん？』

つい最近聞いた声。それとともに床がびしょ濡れになって、雨音が響く。

周りの光景が、石みたいに動かなくなる。

相変わらず頭に直接入り込んできて、気持ち悪いったらない。

「何の用？雨男め。誰が掃除すると思ってるのよ。」

『別に俺が消えれば水溜りもなくなるし。』

便利なのねー、未来ってのは。

『そうそう、便利なの。』

頭の中の声が聞こえるんだったら、私が喋る必要ないと思うんだけど。

『いや、それはずるいからだめ。』

それをいうなら、頭の中の声っていうか考えが聞こえるほうがよほ

どずるいと思う。

多分、これも聞こえてるんだろうけど。

「で？何しにきたわけ？」

『おっと、忘れるところだった。これこれ。』

ジャーン、といってポケットから取り出したのは、金色のアンティーク系時計（水浸し）。

見たところ時計の針は止まってて、壊れてるみたい。

『これは、あんたの彼氏の記憶の状態を見るための時計だよ。記憶が戻れば戻るほど、針は進む。一回転したら、タイムアウト。』

はい、と私の手に乗せる。

途端、私の手が濡れた。

触るな、雨男。

『ミネルヴァだって何回言ったらわかるんだよ。』

一万回。

『だから口を使えっ！』

——ガラ。

「なあ、本城。水かえまだ……って、何これ。」

ちよ、ちよつと、なんで亮動いてんの!?

時間は確かに止まっている。けれど、亮だけは何事もなかったかのように動いてるみたいだ。

『じゃ、じゃあ俺行くわ。ブツも渡したし。じゃな!』

待ちなさい!この状況どうすればいいのよ!

聞こえないふりをして、空間に溶け込むように消えた。

雨男め、逃げやがって!

私は、心の中でミネルヴァを蹴り上げた。

「りよ、亮!寝てなきゃダメじゃん!」

「なあ今、そこに人いなかった?」

「いないいないっ……もう、何言っちゃってんだか……」

未来から来てあなたのことを蘇らせた人です、何ていえるわけなし。

普通、信じないしね。

私は半ば強引に、亮を病室へ戻らせた。

「で、さっきの続きなんだけどさ……」

ドクンドクン、と鼓動が高鳴る。

「俺さ……本城のこと……何て呼んでた？」

へ？そ、そんなこと？

ほっとため息が出てしまったのは何故だろう。

「あ、亜美って呼んでた……けど……」

「やっぱり？何か、『本城』って言うのに違和感があるっていうか・
……変だよな。記憶ねえーのに、違和感あるなんてよ。」

何となく、嬉しかった。

思い出は忘れてしまっても、身体が覚えていてくれる。

そんな些細な事なのに、たまらなく嬉しかった。

力子。

音がした。

ふと時計を見ると、針が少し動いていた。1分くらい。

「・・・っ・・・」

「どうか、した？」

「べ、別に・・・なんでも・・・」

こんなに怖いんだったら、こんなものいらなかった。

針が動くたびに、ドキドキする。

もちろん、悪い意味で。

第三章 東の雲は不吉雲？

「おはよう、亮。」

「おお、また来てくれたのか。毎日毎日、悪いな。」

当たり前だよ、一応彼女なんだから。

多分、覚えてないと思うけど。

「1人だと、暇だと思ってさ。」

「暇に決まってるんだろ？俺、病院ってどうにも苦手だよ。」

「そ、そうなんだ……」

きつと今、少しだけ記憶が戻ったんだ。

だけど、時計の針も進まないくらいの些細な記憶。

ガラッ。

ノックもなしにいきなり扉が開いて、私は驚いてすぐさま振り返った。

「よ、久しぶり。」

「東雲^{シノノメ}くん。どうしたの？」

「どうしたって……見舞いだよ、見舞い。」

苦笑いしながら、持ってきたフルーツの盛り合わせをテーブルの上に無造作に置いた。

この人は東雲 ^{カオル} 郁くん。

亮とは、結構仲がよかったみたい。

東雲くんの家は茶道の家元らしくて、言わずと知れたお金持ちのお坊ちゃま。

そのせいか、髪の毛の色は燃えるような赤。

身長は180をゆうに超え、私は見上げる形になる。

「じゃあ、私外してるよ。友達同士、話すことあるでしょ？」

「ま、待て、亜美。俺、こいつのことまだ…」

「『こいつ』？ 亮、お前なんかあったか？」

何となくこの空気の中にいるのが嫌で、亮の声は聞こえていたけどそそくさと病室を出た。

私、実は東雲くんに告白されたことがあるの。

でもそのときにはもう亮と付き合っていて、考える間もなく断った。それ以来、友達として振舞ってはくれているけど、やっぱりなんか

気まずいんだよね。

「はあ… もう何か、やんなっちゃうな……」

屋上で、流れ行く雲を見つめながら、大きなため息をつく。

そろそろ、話も終わるだろうか。

でも二人は親友だったんだし、やっぱりそんなに早くは終わらないか。

カチッ。

確かに、また針が動いた。

「雨男のバカ… こういうときこそ、来いつてのよ…」

「『雨男』って、誰のこと？」

「えっ！？ あ、なんだ、東雲くんか…」

「そんなあからさまに残念そうな顔しないでよ。俺だって、傷つくんだぞ？」

どさくさに紛れて私の隣の手すりに寄り掛かり、缶ジュースを差し出してきた。

ありがと、とお礼を言って、缶ジュースを開ける。

「記憶……ないんだってな。亮のやつ。」

「…うん、なんかそうみたい。」

「話してないの？亜美ちゃんが、恋人だったってこと。」

言えるわけ、ないじゃん。

ただそこにいてくれるだけで、満足だもん。

「記憶なくて混乱してるところに、『恋人です』なんて言っただけで、もっと混乱するだけでしょ？まあ、いずれは言うかも知れないけどね。」

「そっか。」

東雲くんは、ぐいっと缶コーヒーを一気飲みして、にやりと意味深な表情を浮べた。

そして、ゆっくりと口を開く。

「じゃあ、俺にもまたチャンスが巡ってきたわけだな。」

「え…？」

「俺が亜美ちゃんを好きだって言ったこと、覚えてるよね？」

「……う、うん。」

「記憶がない亮と俺は、今のところ立場上ドロ―だろ？それに…俺なら、亜美ちゃんのこと、絶対に悲しませないけどな。」

じつと瞳を覗かれて、つい顔が赤くなる。

私の心は決まっている。亮以外、考えられない。

だけど、ここまで言われると流石の私も小さな波風が立つ。

「私は…」

「考えといてよ、俺のこと。それじゃあ、今日俺、茶点でないといけないから。」

見事に押し切られてしまった。

私は、再び大きなため息をついた。

「いい加減、察してよ……」

心底、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4240d/>

未来時計

2010年10月9日21時41分発行